

星
空
鉦
山

第一章 入り口

夏休みのある日のこと、ある家族が旅行で今は閉山してしまっている鉱山を訪れた。

父は宝石商で、今までなかなか家族と一緒に旅行をすると言ったことが出来なかった。

少し大きくなったおなかを抱えた母は、新婚旅行以来とも言えるこの旅行で、娘と息子がもっと父と過ごす時間が増えれば良いなど、そう思っていた。

今お腹に居る子が生まれてからも、またこんな旅行が出来たら。そんな話を夫にする。

その家族の子供は、中学生くらいの少女が一人と、小学校中学年か高学年くらいの少年が一人。それから、子供と言った良いのだろうか、少年と同年の飼い犬が一匹。

今回の旅行先は、家族全員で決めた。

夏休み。と言う事は、少女にも少年にも宿題が有る。

少女は美術の宿題に砂丘の絵を描きたいと言い、少年は理科の自由研究で鉱山のことを書きたいと言っていた。

数日組んだ日程の中で、一昨日は砂丘に行ったから、今日は鉱山。

山の中に有る、ぼっかりと闇を湛えて口を開ける入り口。

その周りには観光用か、資料館などが建ち並んでいる。

父や、母や、姉がどこから見ようかと言う話をし、飼い犬までもが少年から目を離れたその隙に、少年は吸い込まれる様に鉱山の入り口へと入って行った。

第二章 玄武岩

鉾山の中は、真つ暗だった。

入り口から差し込む光が届かなくなると、湿った冷たい空気も相まってまるで夜の中に居る様だった。

普段、怖い話を聞いた後などは暗い所には怖くて居られない臆病な少年だったが、何故か今は暗くても恐怖が湧かない。

時折段差から足を滑らせながら進んだ先で、少年は驚きの声を上げる。

目の前と頭上には、星では無いけれども、輝く物が広がっているのだ。

まるで夜空に包まれている様な感覚になりながら周りを見渡すと、ほのかに光る洋燈ようとうを持った人影があるのに気付いた。

「やあやあ、ここに人が来るのは、久しぶりだねえ」

妙に明るい口調で話しかけてくる人影を、少年はお化けかもしれないと思ったが、やはり恐怖は湧いてこなかつ

た。

「ここ、何なんですか？」

鉾山の中つて光るんですか？」

少年が人影に問いかけると、黄色いフード付き外套を被り、洋燈をもった人影が近づいてきてこう言った。

「鉾山の中。確かにここには鉾山の入り口から来られる。でも、正確には、ここは鉾脈の中なんだよ」

鉾脈の中。鉾脈というのは一体何だろう。不思議に思った少年は首を傾げる。

「石に興味があるなら、案内してあげるよ。」

夏休みの宿題にびったりだろう」

この夜空の様な空間を案内してくれる。この言葉に少年は嬉しそうに、案内して欲しいという。

それから、少しだけ困った様な顔をして、人影に訊ねた。

「案内してくれるのは嬉しいんですけど、なんて呼べばいいですか？」

人影は、くすりと笑って答える。

「私のことはおじさんと呼んでおくれ。」

君からしたら、私はおじさんぐらいの歳だろう」

「わかりました！」

それじゃあ、よろしくお願いします。おじさん」

おじさんの手招きで隣に並んだ少年は、洋燈と輝く物の光の中、奥へ奥へと歩みを進めた。

歩みを進める中で、少年は宙に浮いた、オリーブ色の石を見付けた。

水晶の様な形をしているけれども、こんな色の水晶は見たことが無い。

「触つても構わないよ」

おじさんの言葉にその石を手に取り、じつくりと眺める。それから、あ。と声を上げて少年が言う。

「おじさん、これ、ペリドットでしょう？」

お父さんのお店で磨いたやつを売ってるんです」

「ほう、君の家は石屋さんなんだね。」

その通り、その石はペリドットとも言われているね。

おじさんは、苦土カンラン石っていう名前で普段は呼んで

いるけれど」

「クドカンラン石？」

「マグネシウム？　　っていうのが混じった石だから、そう言う名前なんだ。」

『苦土』の『苦い』っていう字は、マグネシウムの事だよ」

初めて結晶の形をした苦土カンラン石を見て驚いている少年に、おじさんは丁寧に説明をする。

それから、ここ一帯は玄武岩だね。と。

玄武岩と聞いて、少年は名前は知ってるけれど、どんな物なのかはわからないと、またおじさんに尋ねる。

おじさんは、少年に説明する。

火山岩の一種で、マグマが早く冷めて出来上がる岩だよ。そう言った。

それから、火山岩は何種類か有って、他にも蛇紋岩、安山岩、流紋岩と言うのが有るよ。と少年に言い、まずは火山岩から案内しようと、洋燈を揺らした。

第三章 造岩鉱物

苦土カンラン石が姿を見せなくなった頃、沢山の深緑色をした結晶と、黒いけれどもつやつやと光を照り返す結晶が、少年の目に入る様になった。

こんな宝石は見たことが無い。そう思った少年は、おじさんにこれは何なのかを尋ねる。

「おじさん、これも宝石なんですか？」

おじさんは肩をすくめて答える。

「これは、少なくとも今は宝石では無いね。」

これは玄武岩や安山岩、それと、マグマがゆっくり冷えて固まって出来る、深成岩という種類の岩の中でも、斑れい岩と呼ばれる物に、当たり前の様に混じってる、岩を作る鉱物だよ」

その説明に、少年は眉尻を下げる。

「うう、なんか、難しいです」

情けない顔をしながらも石の結晶が気になるのか、深緑と黒色を一つずつ握る少年に、おじさんが頭を撫でなが

ら視線を合わせる。

「そうだね、岩を作る石だって思っておけば大丈夫。

それより難しいことは、中学校…… いや、高校に入ってからやるかどうかと言うくらいだから、今は覚えなくて良いよ」

おじさんの言葉に何とか納得した少年は、結晶を握っていた手を開く。

この結晶の名前が気になったのだ。

また、おじさんは名前を教えてくれる。

深緑の結晶が普通輝石。

黒色の結晶が普通角閃石。

名前がわかって安心したのか、柱状の、小さな小さな結晶を少年は手放す。

すると普通輝石と普通角閃石はふわりと浮いて元有った場所へと戻っていった。